第3節　これまでの会場計画の検討経緯

本事業の検討経緯については、昭和63年に愛知県、名古屋市、地元経済界が21世紀初頭の国際博覧会開催構想の推進を合意したことに始まり、その後、各種調査研究が行われ、平成2年2月、

(1)　名古屋都心から20キロ圏内にあり、大都市機能が活用できる。
(2)　既に整備済みの交通基盤、さらには将来の整備計画がある。
(3)　将来の地域づくりについて戦略的な目標があり、具体化に向けた取り組みが進められている。
(4)　まとまった用地の確保が比較的容易である。

という理由から、国際博覧会の会場候補地選定の条件を備えている適地として瀬戸市南東部が選定された。

平成6年6月には、愛知県、名古屋市、地元経済界等からなる21世紀万国博覧会誘致委員会の基本構想策定委員会が、会場エリアを約650ヘクタールとする自然と共生した会場構想をまとめた。

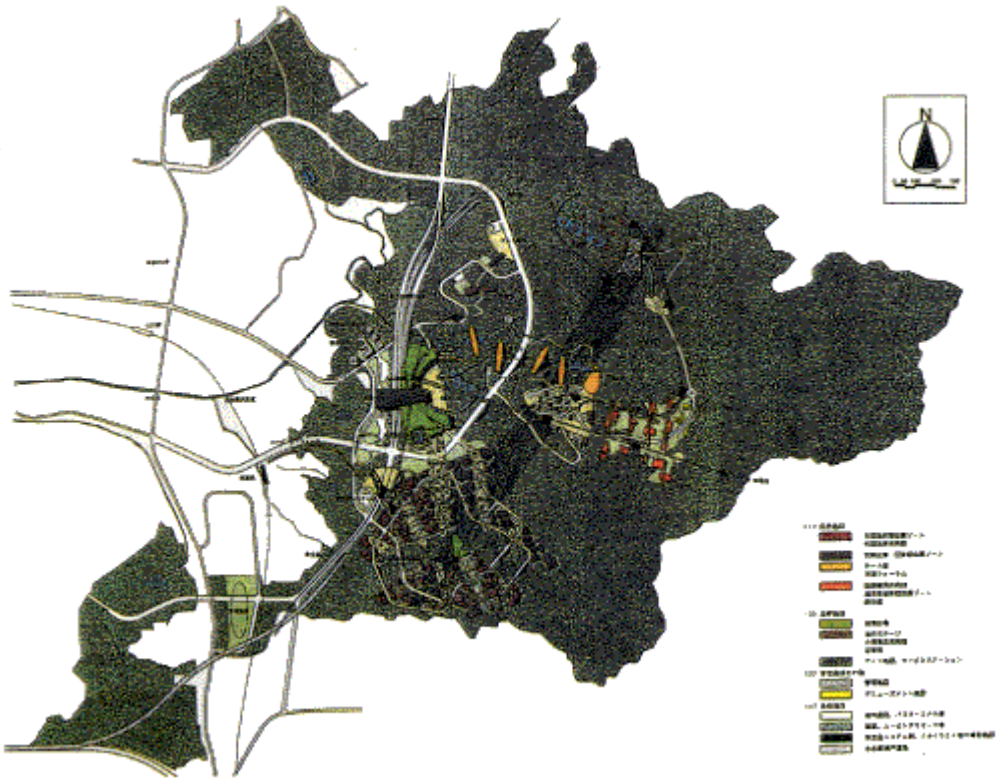

図２－３－１　会場構想図（平成６年６月）

その後、平成７年８月に通商産業省において国際博覧会予備調査検討委員会が設置され、地元構想を基に議論が進められるとともに、通商産業省、環境庁、愛知県等関係機関による調整が行われた。その結果、会場エリアの現況森林をできる限りまとまった形で残すことを基本とし、西側部分は周辺の森林と連続する形で自然を保全するとともに、貴重な動植物や湿地の保全が図られるよう配慮することが重要であるとして、主たる会場面積を約 250 ヘクタールとした。この内、約 150 ヘクタール（Aゾーン）については、約 80 ヘクタールに展示施設等を、また、約 70 ヘクタールに緑地･公園を配置し、残り約 100 ヘクタール（Bゾーン）は自然とのふれあいの場として位置づけた。さらに、その北部･東部の森林約 290 ヘクタール（Cゾーン）は森林体験ゾーンとし、会場エリアを概ね 540 ヘクタールに縮少するなどの結論を得た上で、政府において閣議了解が行われている。

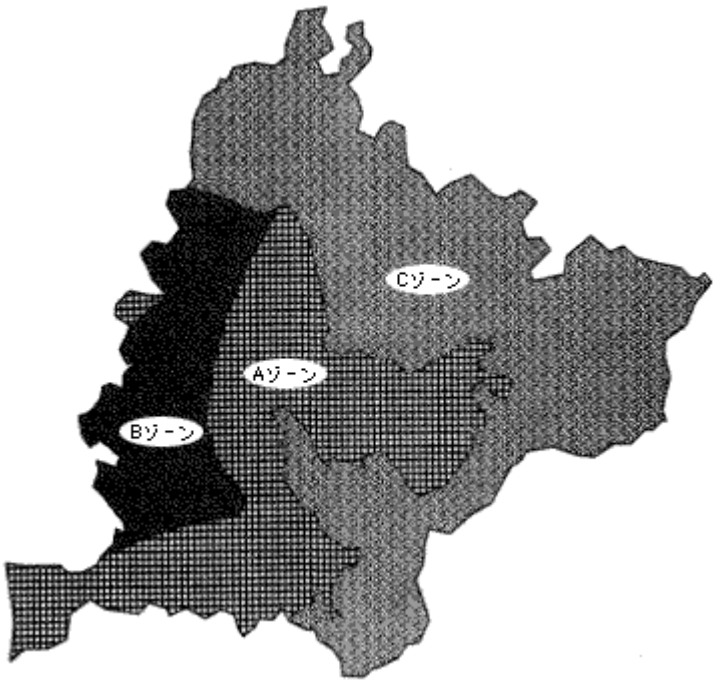

図２－３－２　会場候補地の大まかな区域設定イメージ（試案：平成７年１２月）

なお、図4－15－1（注目すべき植物種からみた保全重要性の高いエリアの分布と計画案）、図4－15－2（シデコブシ集団の分布と計画案）、図4－16－2（オオタカの経年的利用が確認された営巣期高利用域と計画案）、図4－16－6（ハッチョウトンボの生息確認地と計画案）、図4－16－8（スズカカンアオイの確認位置と計画案）、図4－16－9（注目すべき動物種確認位置と計画案）等に見られるように、Bゾーンの設定により保全重要性の高い動植物等に対する影響は相当程度回避または低減されていると判断できる。

（第 4 章第 15～16 節）

これらの経緯を経て、通商産業省、愛知県、名古屋市及び経済界において、21 世紀国際博覧会推進委員会が設置され、同委員会で会場候補地の主要施設地区の中央部や隣接した東側のエリアを高密集約型として位置づけ、それ以外のエリアは比較的低密利用とした会場構想が策定された。

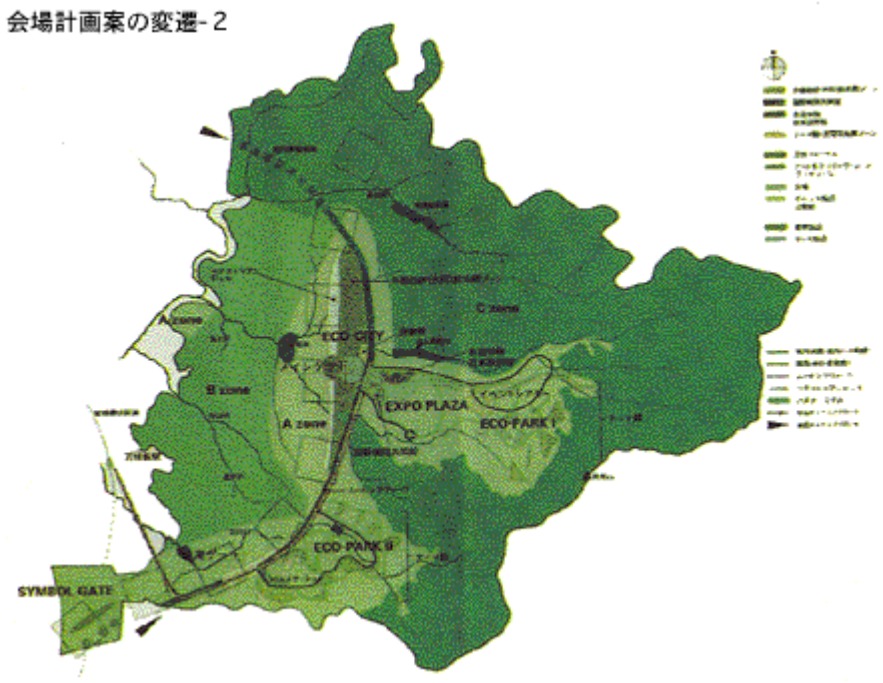

図２－３－３　会場構想図（平成８年１１月ＢＩＥ予備調査団説明時）

平成 8 年 4 月、政府は博覧会国際事務局 (BIE) に開催を申請し、平成 9 年 6 月の博覧会国際事務局の総会において、我が国の提案が加盟国の支持を得て、本国際博覧会の開催が決定されたものである。

平成 9 年 10 月、財団法人 2005 年日本国際博覧会協会設立に引き続き、協会に会場計画等を検討する企画運営委員会を設置した。その委員会の中に設けられたプロジェクトチーム等では、博覧会国際事務局に提案した会場構想を基に検討を重ね、より水系について考えを深めるとともに、森林の利活用を考えた、人と自然の新たな関係を生み出す会場基本計画を検討している (図2－3－4～8)。

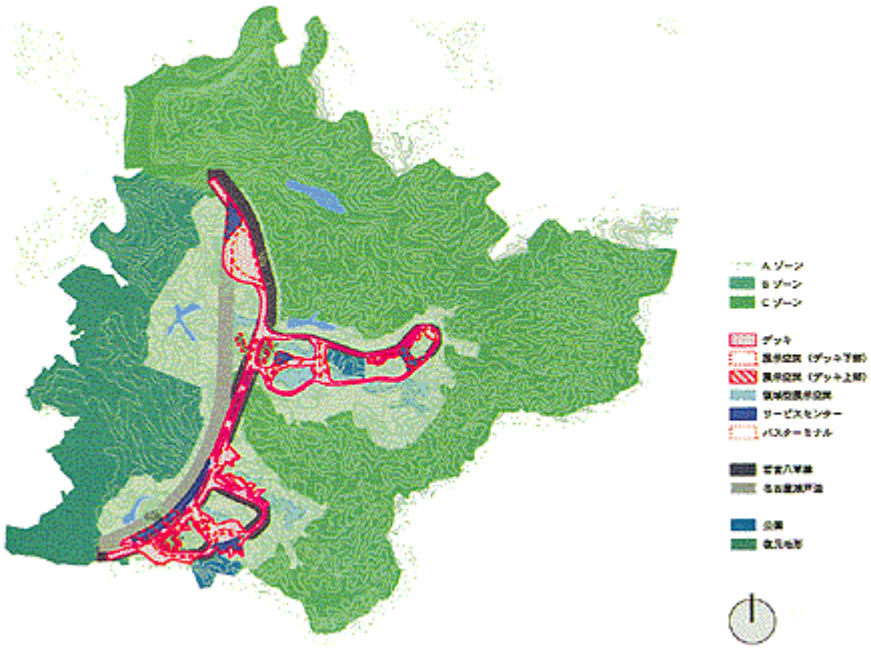

図２－３－４　主要地区（Ａゾーン）の展開（平成１０年７月１７日公表）

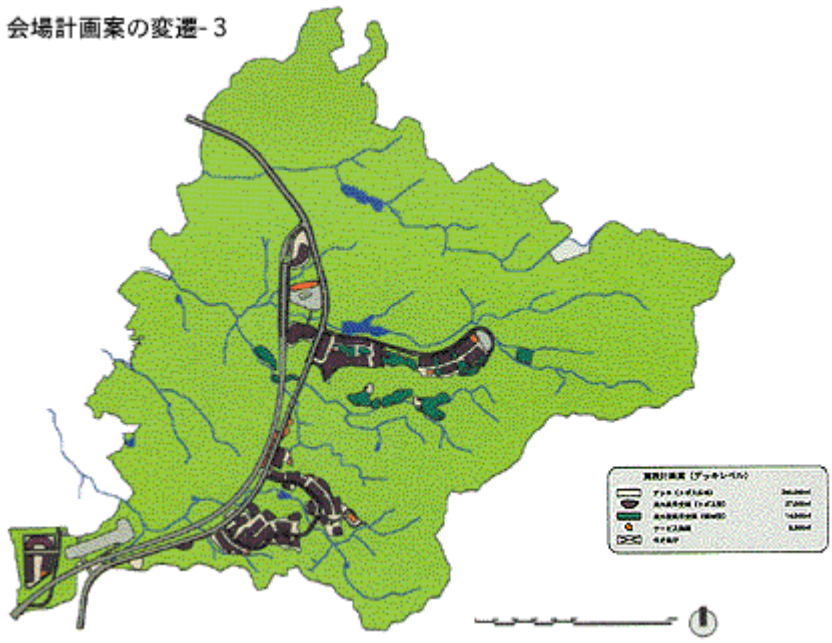

図２－３－５　施設計画案（平成１０年１１月２７日公表：デッキレベル）

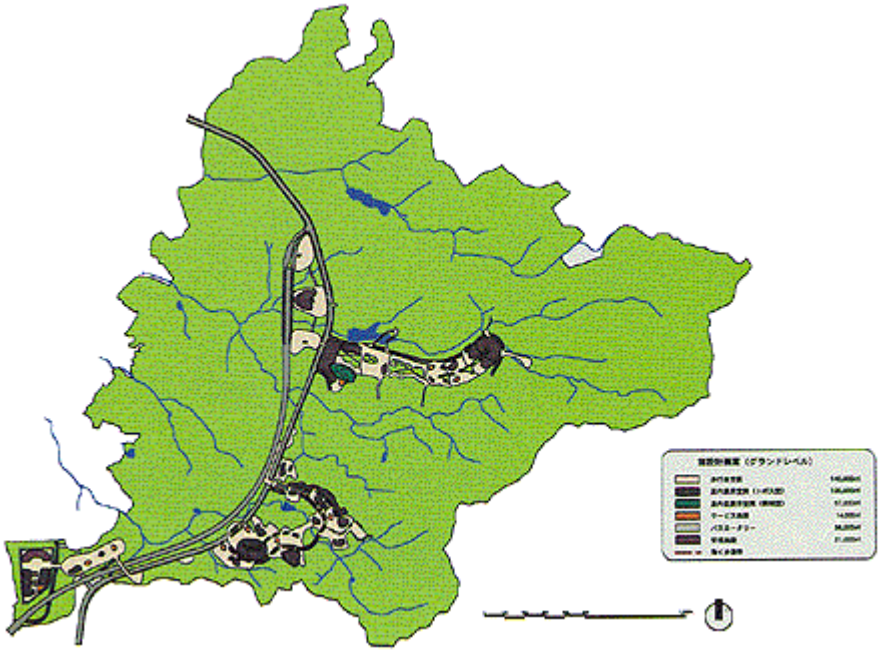

図２－３－６　施設計画案（平成１０年１１月２７日公表：グランドレベル）

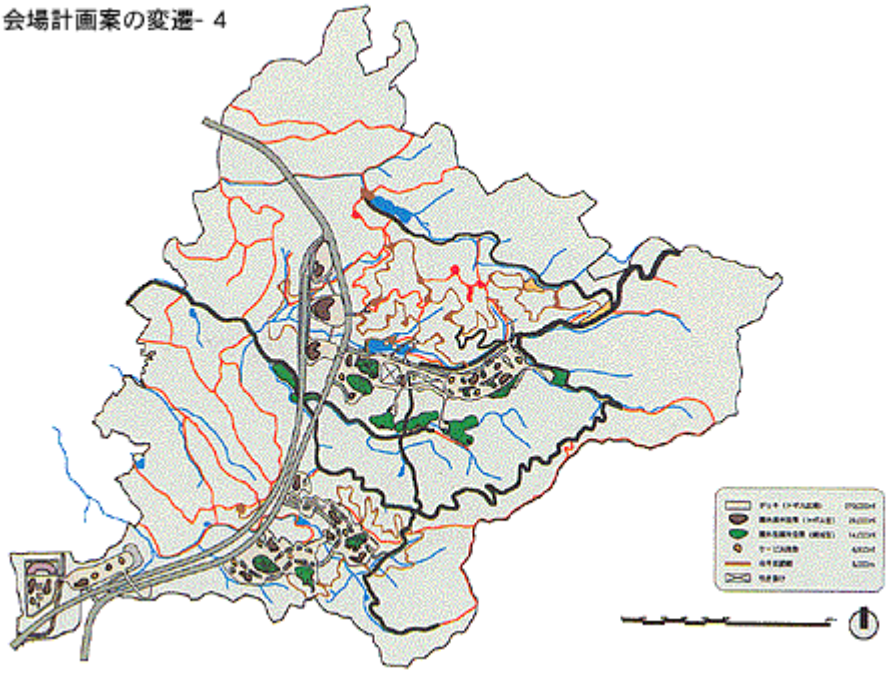

図２－３－７　施設検討案（平成１１年１月２２日公表：デッキレベル）

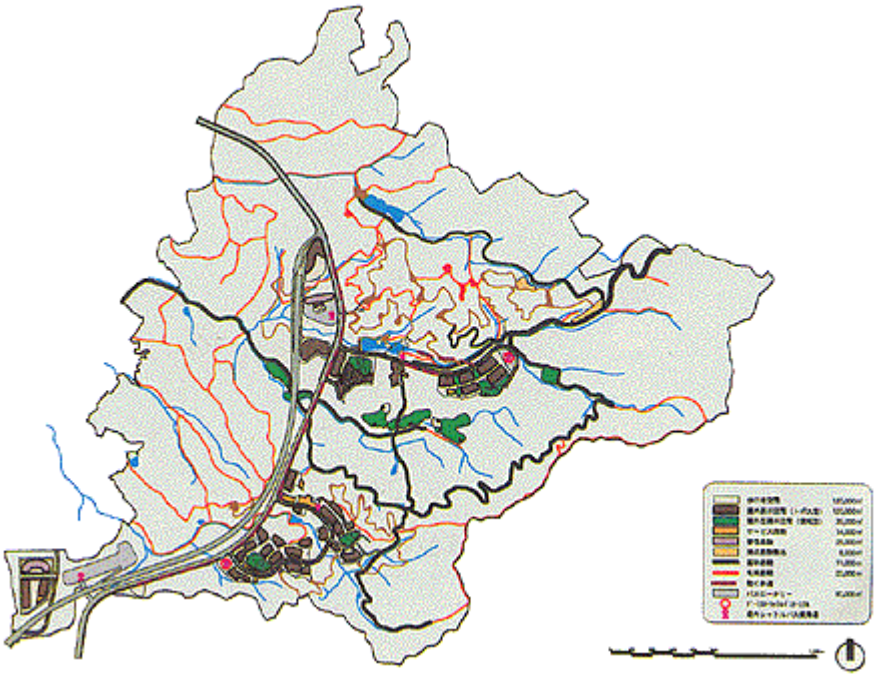

図２－３－８　施設検討案（平成１１年１月２２日公表：グランドレベル）